

海舟に続け！

勝海舟記念館企画展

若者たちの異国見聞

2025 11.14 Fri ~ 2026 3.8 Sun



ギャラリートーク 11.19 Wed / 12.6 Sat / 2.8 Sun / 3.5 Thu (14時~)

勝海舟肖像写真 (個人蔵)

大田区立 勝海舟記念館

Ota City Katsu Kaishu Memorial Museum

- 開館時間 午前10時~午後6時
※毎週月曜(祝日の場合は翌日)、年末年始は休館
1月19日(月)・20日(火)は一部展示替えのため休館
- 入館料 一般300円、小中学生100円(各種割引有り)
- 所在地 東京都大田区南千束2-3-1
- 電話 03-6425-7608

※最新の情報は、区ホームページをご覧ください。



『実に西洋を見は、日本改革必要の事にして』—— (ペルス・ライケン)

にちべいしゅうこうつうししょうじょうやく

安政7、改め万延元(1860)年、日米修好通商条約批准使節の派遣に伴い、勝海舟は別船「咸臨丸」船将に任じられ、初の海外渡航を果たしました。“真に世界について見識を養い、国家を支える人材を育むには、異国見聞に勝る方法は無い”と痛感した海舟は、以後、有志の日本人の渡海を推奨しました。

新時代・明治を迎えると、政府の国際社会参入の流れの中で数多くの日本人が海外に赴き、中には、海舟を海外渡航の先駆者と敬い、その高風を慕った若者たちの姿もありました。彼らは渡航先から日本の海舟に手紙を寄せ、万国の情勢や地域の様子をつぶさに伝えています。海舟自身の渡海経験は万延元年の一度きりでしたが、その志は次世代へと引き継がれ、海舟自身、ひいては国家にとって、未開の世界に対する目となり耳となったのです。

本展では、海舟の支援を受けた渡航者の手紙等から、海舟の彼らへの支援内容や、薫陶を受けた若者たちの海外における体験と思いを紐解き、人材養成におけるメンターとしての海舟の役割を明らかにします。

海舟に続け！

勝海舟記念館企画展

若者たちの異国見聞

2025 11.14 Fri ~ 2026 3.8 Sun ギャラリートーク 11.19 Wed / 12.6 Sat / 2.8 Sun / 3.5 Thu

お前は何処へ なんしに行くんだい どうしてそれをお思ひ立ちだい

孫安斎殿
小島弘道
明治25(1892)年10月28日付
勝海舟宛 小島弘道書状(部分)

明治時代、赤坂氷川邸には海舟に面会を求める来訪客が日々列をなし、中には、海外渡航の前に海舟の激励を求めて挨拶に訪れる者や、海舟に外国人への紹介を依頼しに訪れる者の姿もありました。

リこうしょう 李鴻章への紹介を求めた川崎三郎(ジャーナリスト)や、ハワイでのキリスト教伝道を志す江上源三(同志社生)を紹介した小崎弘道(牧師)、ロシアへの渡航志願者・福田宇太郎を紹介した島田三郎(官僚、ジャーナリスト)らの手紙を展覧します。海外渡航の先達としての海舟の存在感と、彼ならではの人脉の広さ、役割がうかがえます。

いゝ考へだ 考へが面白いじゃないか



海舟は渡航志願者を面接し、その人柄や渡航目的、志の固さを確認し認めると、叱咤激励の言葉をかけると共に、志願者の事情や要望に応じた支援を施しました。時には、銭別として揮毫を書いて贈ることもあったようです。

徳富猪一郎(蘇峰。ジャーナリスト)もその一人。海舟から留学資金援助を受けた際の礼状と、渡航保証人になってもらうよう頼んだ際の手紙を紹介します。

海舟先生
周下
明治29(1896)年4月22日付
勝海舟宛 徳富猪一郎書状(部分)

徳富猪一郎(同『蘇峰自伝』(中央公論社、1985年) 国立国会図書館蔵 より)

お前のやうな血氣熾んなものがやらなけりや 誰もやるものはありやしないよ

明治11(1878)年6月3日付 勝海舟宛 中山寛六郎書簡

海舟の後押しを受けた若者たちは、アメリカやイギリス、ドイツやロシアなど、世界各国へと旅立っていきました。彼らは現地の言語に苦戦しながらも、政情や風土に触れ、新鮮な喜びや驚嘆を感じ、海舟に報じました。やがて彼らの多くは、国際社会における近代日本を導く外交官や有識者へと成長していきます。

なかやまかんろう 中山寛六郎(開成所出身)や、イギリスに渡った小浦鍾三郎(紀州和歌山藩出身)、ドイツに留学した荒木卓爾(旧幕臣・西周門下生)や、ロシア・清国で見識を培った島田三郎(伊勢津藩出身。後の吉林省初代領事)の手紙から、彼らの志を紐解きます。